

少女と老兵士

小川未明

青空文庫

某幼稚園では、こんど陸軍病院へ傷痕軍人たちをお

みまいにいくことになりましたので、このあいだから幼い生徒らは、歌のけいこや、バイオリンの練習に余念がなかったのです。きょうも、「父よあなたは、強かつた」を、バイオリンを弾くものと、うたうものとで調子を合わせたのでありました。

「よくできました。これでおしまいにしましょうね。あしたは、お国のために、負傷をなさつた、兵隊さんたちをおみまいにまいるのですよ。」と、女の先生がいました。

門から流れ出る生徒らを、二人の若い保母が、たがいに十五、六人ずつ引きつれて、いつものごとく、道を左右に、途中まで

見送みおくつたのであります。

「ああ、わたしにくたびれたわ。先生せんせい、おんぶしてちょうだい。」
と、白しろい帽子ぼうしを被かむつた、一人ひとりの女おんなの子こが、お姉ねえさんにでもねだる
ように、保母ほぼさんに、いいました。

子供こどものわがママをきくことになれている、そして、できること
はしてやっている彼女かのじよは、日ひの照てり返かえす、道みちの上うへへかがんで、
背中せなかをまるくして、その子こをおぶおうとしました。すると、かた
わらから、

「先生せんせい、わたしもよ。」と、いって、目めのぱつちりした、同じおな
年としごろの女おんなの子こが、いっしょに飛とびつきました。たとえ小ちいさく
も、二人ふたりの子供こどもの力ちからに押おされて、若わかい保母ほぼは、危あやうく前まえのめりに

なろうとしました。

「いつしよに、おんぶできせんから、ひとりずつになさいね。」
 ふたり
 二人が、手を放した間に保母は、立ち上がりました。

「赤ちゃんみたいに、おんぶなんかして、おかしいから、さあ、
 ある
 歩いていきましよう。」

先へいった、四、五人の子供たちは、先生のくるのを待つて
 さき
 いました。そして、近づくると両手へほかの子供がひとりずつ
 ちか
 がり、もうけつしてだれにも先生を渡さないというふうにして、
 ある
 歩いていきました。

「とも子ちゃん、あすこに大きなキューピーさんがあつてよ。」
 こ
 さつきの白い帽子を被った子が、ランドセルの中の筆入れを鳴
 しろ
 ぼうし
 かむ
 こ
 なか
 ふでい
 な

らしながら、片側かたがわにある店みせの方ほうに向むかって走はしりました。

「ほんと。」

目めのぱつちりした子こが、その後あとを追おつたのであります。

「大きなおめめで、大きなおぼんぼんね。」

「とも子こちゃんのおめめみたいよ。」

「あら、私わたしの目め、こんなに大おおきくないわ。」

「あら、先せん生せいが見みえなくなつたわ。」

二人ふたりは、店みせの前まえをはなれると、駈かけ出だしました。ちようどその

とき、横よこ合あいから、演えん習しゅうにいつた兵へい隊たいさんたちが道みちをさえ

ぎりました。砲ほう兵へい隊たいとみえて、馬うまが、大たい砲ほうや、いろいろのも

のを乗のせた車くるまを引ひいて、あとからも、あとからも、ガラガラとつ

づきました。兵隊さんの黄色な服は、いくところか、汗がにじみ出て黒くなっています。けれど、くつ音をそろえてわき見もせず、顔を前に向けて進んでいました。

「通れなくて、困るわ。」

「しかたがないわ、兵隊さんですもの。」と、とも子ちゃんは、いいました。

ふと、とも子ちゃんは、頭を上げて、青い空をながめました。すると、なんだか急に悲しくなつたのです。

「兄さんは、どうしていらつしやるだろう?」

翌日の午後でありました。

先生に引きつれられて、女の子

の多い、幼稚園の生徒たちは、そろそろと町の中を歩いていま
した。病院への途中であります。バイオリンを提げている
子をのぞいて、ほかの子供たちは、なにかしら兵隊さんをなぐ
さめるためにあげようとするものを手に持っていました。白い服、
青い服、白い帽子、水色の帽子、ようすはいろいろであります
たが、いずれも小さくてぴちぴちしていて、お人形の行
列のように見られました。通り合わせるものは、だれでも、こ
の無邪気な一人一人の顔をのぞき込むようにして、ほほえまぬも
のはなかつたのでした。やがて、ゴーラストップのところへ出ま
した。けれど、この虫のはうようなのろい行列は、進めも、
止まれも、おかまいなしに歩くよりは、どうすることもできな

つたので、やはり、のろのろと歩いていました。右からも左からも、前まえからも後うしろからも、きかかった車くるまは、みんな子供こどものために止とまつてしまいました。

「兵隊へいたいさんと子供こどもにかかつてはなあ。」と、ガソリンの損そんになるのも忘れて、運転手うんてんしゅが、笑いながらいつていました。

白い雲しろくもの峰みねがくずれたころ、この列れつは、広々ひろびろとした病院びょういんの門もんをはい入はいつて、小砂利こじやりの上うえへ軽かろやかなくつ音おとをたてたのであります。

いくつか病棟びょうとうがあつたが、この幼い子供おきなこどもたちの向むかつたのは、いちばん後方こうほうにあつた、白い病舎びょうしゃでした。そうじのゆきとどいた、大きおおなへやの中なかには、幾列いくれつとなくベッドが整ただしく

並ならんでいました。かたわらの卓たくの上うえには、葉くすりびんや、草花くさばなの鉢はちがのせてありました。そして、白しろい服ふくを着きた兵隊へいたいさんはベッドの上うえへ横よこになつてゐるもの、あるいは、腰こしをかけてゐるもの、また、すわつてゐるもの、また、松葉まつばづえを抱かかえて立ち話たばなしをしてゐるもの、ちようどアルファベットのビスケットのように、その形かたちがいろいろでありました。毎まい日にちのように、個人こじんとなく、団体だんたいとなく、みまう人ひとが絶たえないので、こうした行ぎよう列れつが珍めづらしくなかつたが、この暑あついのに、よくきてくれたと、目めを細ほそくして、汗あせに額ひたいのぬれた子供こどもたちを見ていたものもあります。そのうちに、子供こどもらは、正しょう面めんへずらりとお行儀ぎようぎよく並ならんで、兵隊へいたいさんの方ほうを見て、バイオリンに合あわせてうたいはじめました。

父ちちよあなたは強つよかった

かぶとをこがす炎熱えんねつに

敵てきの屍かばねとともにねて

泥水どろみずすすり草くさをかみ

終おわると、兵隊へいたいさんたちは、手てをパチパチとたたいてくれま

した。拍手はくしゅはそのへやからばかりでなく、へやの外そとの方ほうからも

起おこったのです。それから、子供こどもたちは、一人ひとり、一人ひとり、兵隊へいたいさ

んのそばへいって、自分じぶんの持もつてきたもの、たとえば作文さくぶんや、

自由画じゆうがや、またお人にんぎよう形かたちなどを真まごころ心こころこめて、おみまいにあげ

たのです。このとき、兵隊へいたいさんは、みんなのくれるものを受け

取とつてにこにこしていました。

とも子ちゃんこは、へやの中なかを見まわしてました。自分じぶんは、どの人ひとにあげよう……もとより、自分じぶんの知る顔かおのあろうはずがないけれど、それでも、やさしそうな、話はなしをしてくれる人ひとにと思おもったのです。

若い兵隊へいたいさんたちとくらべて、年としとった兵隊へいたいさんがあちらのすみの方に、さびしそうにしてすわっていました。顔かおにはひげがのびて、片手かたてを繃帶ほうたいしてました。たぶん激戦げきせんに、手てをやられたのでしよう。とも子こちゃんちゃんは、その兵隊へいたいさんのところへいって、自分じぶんが骨ほねをおつて色紙いろがみで造つくった、千羽ちよづるとかめの子こをあげました。

「ありがとう。」と、兵隊へいたいさんは、につこりとして、会釈えしやくし

ました。

「おじさん、うちの兄にいさんを知らないでしょう。」

「あなたのお兄にいさんも、戦せん争そうにいつていられますか。」と、兵へ隊たいさんが、ききました。

「ええ、もう一年ねんになるのよ。」

少しょう女じよは、なにか考かんえ出だそうとするように、ぱつちりとした目めをみはって、窓まどの方ほうを見みました。

「それは、ご苦くろ勞らうさまですね。」

年とし老とつた兵へい隊たいさんは、この子こ供どもの頭あたまをなでてやりたい気きがし
ましたが、やめました。

「また、いいものこしらえたら、おじさんに持もつてきてあげるわ

少女は、振り向いて、先生の立っていらつしやる方へ走つていきました。

病院の屋上へ出ると、清らかな流れのように、いつも涼しい風が吹いていました。月がなく、星明かりでは、たがいの顔もよくわからなかつたが、傷兵たちは、静かにして、レコードに聞き入っていました。両眼を失つて、ここまで上つてくるのに、二人の看護婦の肩に助けられなければならぬ人もあつたが、その人もやがて腰をかけると、じつとして、同じように聞き入っているものであります。あちらの地平線をほど近い、にぎやかな街の燈火が、ぼうと闇を染めているのを見て、兵士の

なか
中には、戦場を思い出すものもあつたでしょう。ちようどレ

コードは、愛馬行進歌をうたいはじめたところですよ。

老兵士も、みんなといつしよに、この歌に耳を傾けていまし

たが、汲み尽くせない悲しみが、胸の底から、新らしくこみ上げ

てくるのを覚えました。同時に、心の目は、昼間慰問にきてくれ

た、幼稚園の生徒らの混じりけのない姿をよみがえらせました。

そして、あの目のぱちりした少女の、

「おじさん、うちの兄さんを知らない？」と、いった言葉までが、

いまだに、耳についているのを感じたのです。

おそらく、あの子の兄も補充兵であろうと思うと、老兵士

をして〇〇攻撃の際に、自分の見た一光景を思い出させるので

した。險阻な敵の陣地へ突撃に移る暫時前のことです。

「君たち、いらぬものは捨て、ごく身軽になつていくのだ。」

こう注意してやると、後方から、前線へ送られたばかりの、若い兵士の一人が、目前で、背囊をおろして、その内を改めていました。そのとき、老兵士は、ふくらんだ背囊をみつめて、まごまごしている若い兵士に向かつて、

「なにがそんなに入っているのか。」と、きいたのです。すると、その年若の兵士は、一つ、一つ出して見せて、

「これは、お守りです。出るときに、みんながくださったのです。」

「これは、お薬りです。お母さんが、入れてくださったのです。」

「これは、日の丸の旗に、たくさんの人の名が書いてあるのです。」

「これは、姉からの手紙です。みんな、大事なものばかりです。」
 そういつて、じつと老兵士の顔を見上げた、あの青年の澄んだ目には、これを身につけて自分は死んでいくという純情があらわれていました。

「いや、おれたちの体が弾丸になるのだ。みんな捨ててしまえ！」と、老兵士は、口まで出たが、無理に、だまって、じつと若い兵士の顔を見返しました。その光った瞳の中に、たとえ肉体は亡びても、けっして永久に死なない生命のあることが刹那に感じられたのであります。

いま、老兵士は、蓄音機の歌をきくためではなく、そのときのことを思い出して、深くうなだれていました。

「まもなくして、あの突撃が起こったのだな。」

大きく開いた目、真つ赤な顔、火がだるまのようになって、敵陣目がけて、一塊となつて、突っ込んでいった友軍の姿

が……。

「おじさんは、うちの兄さんを知らないでしょう。」

またしても、こういつて、自分を見上げた、少女のぱつちりとした目が浮かびました。その目は、清らかなうちに、どこか悲しみに傷んだところがあつた。

「おお、あのとときの青年の目と、さつきの少女の目と同じ

でなかつたか。」と、老兵士は、おどろきました。さらに、彼は、二人が、兄妹でないのかとさえ考えられるのでした。

それは、あまりにも空想的な考えようであつたでしょう。しかし、たとえ兄と妹でなくても、その澄みきつたかがやく目の中に、相通ずるものを見ました。人間であつて、人間以上のものを感じたのです。

「いったい、それはなんであろうか。」と、彼は、考えました。そして、ついに、悟りました。生命というものは、はかないが、眞実は、なんらかの形で永久に残るといふことでした。

彼は、しだいにふけていく、初秋の夜の空を仰ぎました。金色に、緑色に、うすく紅に、無数の星が輝いています。

おそらく、どの一つにも烈々として、炎が燃え上がっているに
ちがいない。しばらくすると、それが、みんな人間の目になつ
て見えるのでした。寂然として、ものこそいわないが、永
遠に真実と正義とを求めている。その光は、胸の底に深く浸
み入つて、魂をかきむしるのでした。

「傷がなおつたら、早く戦線へ帰ろう。」

彼は、ほつとして、はじめて多くの傷兵たちといつしよに、
レコードに耳を傾けようとしたが、いつのまにか心は、また、あ
らぬほうへと飛んでいました。

「人間は死ぬと、あの星になるつてな。」

すでに、去年のいまごろ、塹壕の中で、異郷の空を見な

がらいった、
戦^{せん}友^{ゆう}の言葉^{ことば}が、
思^{おも}い出^ださせられたのでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「赤土へ来る子供たち」文昭社

1940（昭和15）年8月

初出：「中央公論」

1939（昭和14）年8月

※表題は底本では、「少女《しょうじょ》と老兵士《ろうへいし》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年6月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

少女と老兵士

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>